

# 定住と放浪

岡崎 武志

プロフィール  
1957年大阪府生まれ。書評家。立命館大学卒業後、高校の国語講師となる。その後、出版社勤務を経て、現在は書評を中心に各紙に執筆するフリーライターとして活躍している。『女子の古本屋（筑摩書房）』人と会うカ（新講社）、『古本入門』（中央公論新社）など著書多数。

この秋、雨の日、林芙美子記念館（新宿区）を訪ねてきた。林にとつての終の住処をそのまま記念館としている。坂の途中の瀟洒な日本家屋である。代表作放浪記に象徴されるように、林は出生からまさに「放浪」の生涯で、住居を転々とし、現・上落合から中井町周辺で二度目の転居の末、「定住」場所を見つけた。天性の「放浪」者であったはずの林が建てた「定住」の家が、じつに趣味のいい、落ちついたものであったのは意外だった。しかし、「定住」は林に似合わなかったのか、一〇年ほど住んで、あの世に旅立った。

私も転居の多い人生で、数えてみたら生まれてから今までに少なくとも二五回は引越しをしている。上京してからも四回目。東京西郊の一軒家に居を構えたのが二五年前。おそろしくここが終焉の地となるだろう。ところが面白いくに、「定住」が約束されてから、山頭火や井月など漂泊の俳人「男はつらいよ」の寅さんに興味を持つようになった。宮本常一を読み始めたのも同時期である。「定住」と「放浪」は、天秤計りに掛けたように、どちらかに比重が傾くと、大きくバランスを崩し、反対を重くしたくなるらしい。しかし、もう「放浪」はできない。そこで、無性に旅の空に生きる人に憧れるらしい。

日本では、菅江真澄、柳田国男、宮本常一など、旅すること学問の端緒を見つけ、人生の立ち位置を見つけてきた人もじつに多い。「旅にでて、自分の生活と

は異なる世界に身をおき、さまざまなことを発見する。民俗の発見もその一つである。近世の民俗の発見は旅から始まった」と、先述の人たちを論じた『日本民俗学の開拓者たち』で福田アジオが書いている。周知の通り、柳田は一九〇八年夏に九州を長く旅し、一月には佐々木喜善と出会い遠野の不思議な話を聞き取る。「定住」からは生まれぬ知識と発想であった。

しかし、芭蕉に始まって、その異端の弟子・路通、山頭火、井月、牧水と放浪の詩人を並べても、「放浪」しっぱなしということはなく、折々に故郷へ戻ったり、知人の家に長期間厄介になるなど、「定住」の匂いを残している。山頭火は家庭を持つがそれを捨て、出家得度の末、一鉢一笠の旅に出る。放浪の途中、知人の家を訪ね歩き、ときに無心をし、人臭さが消えることはなかった。一九二九年には妻が営む額縁店「雅楽多」に一旦腰を落ち着けるも再び家を出る。「定住」は長続きせず、ふらふらと「分け入つても分け入つても青い山」の野をさすらうことになるのだ。

「男はつらいよ」の寅さんは、喉嚨売で日本中を旅するが、故郷の葛飾柴又には「定住」する優しい妹のさくらがいつも待っている。お盆時期や正月になるとどこからともなく現れる寅さんは聖性を帯び、折口信夫のいう「まればと」のように見える。「定住」する者にとつて「放浪」は人生の味だが、ときに寅さんそれはずるいよと思つのである。

- 10 ○○してみました世界のフィールド  
日本で唯一のユニバーサルシアター  
飯泉 菜穂子
- 12 みんなく Information
- 14 想像界の生物相  
龍に生まれ変わる  
信田 敏宏
- 16 新世紀ミュージアム  
地中美術館  
三島 禎子
- 18 シネ倶楽部 M  
サーミの歌、ヨイクをめぐる心の旅  
——「受け継ぐ人々」  
川瀬 慈
- 20 ながなんちゃ  
トナカイの口メさん  
大石 侑香
- 21 次号予告・編集後記

- 1 エッセイ 千字文  
定住と放浪  
岡崎 武志
- 2 特集 南アジア、弦の響き  
遙かなる弦楽器の旅  
寺田 吉孝
- 4 インドの弦楽器サロードとの出会い  
田森 雅一
- 5 インドネシアのルバップ  
福岡 正太
- 6 シタールを日本で使うということ  
小日向 英俊
- 7 イランの弦楽器 サントウル  
谷 正人
- 8 トルコでサズを奏でる日々  
米山 知子
- 9 南インドのゴットウヴァーティヤム  
寺田 吉孝

月刊  
みんなく

2月号目次